長期にわたる実践を書くことによる教師の専門性の発達
（2）学校づくりと同僚性の構築

松木健一・木村 優・岸野麻衣
（福井大学教職大学院）

問 題
教育実践研究の多くは、教育的事象を対象化し、客観的に眺望することで法則を明らかにしようとしてきた。しかし研究者が養成し、専門職養成の視点から実践記録を捉えると、絶え間ない省察的実践の中で確認できた教師自身の成長、それが物にを子どもの発達、実践を支えるように変貌した学校組織等が、教師自身を含む実践的範囲として整理されることが重要である。なぜなら、当該教師が構築した範囲は、その教師が直面するであろう新たな実践に向けて、当事者として内部から足場と段取りを提供するからである。

ところで、優れた長期的実践記録は教師や子どもの発達と、学校の組織づくり等が分離されることなく包括的で表現されていることが多い。優れた実践では、これからの学びが兼行的に行う。さらに相互に絡まり合い、総体として学びを構成するからである。本研究では、1つの長期実践報告を分析対象として、学校づくりと同僚性の構築に焦点をあて、その変遷プロセスを抜き出し、

目 的
福井大学教職大学院では、長期実践報告を2年間かけて作成することを教育課程の中核においている。提出すれば、実践者は2年後に長期実践報告を作成することを念頭にお実践しており、実践はたとえば長期実践報告というテクスト平面上、語りと傾聴というコミュニケーション平面に写像されつつ、それぞれの反射を受けて実践されている。つまり、学校の中での実践の省察に加え、大学での月例カンファレンスでの省察、夏季休業中に他の優れた実践記録や実践理論書を講読しつつ、自身の実践をまとめる過程を通じて省察が行われている。本研究では、これらの平面上から受けた反射が、対象教師の学校づくりと同僚性の構築にどのように融合されていくのかを中心に検討する。

方 法
小浜市立小学校に勤務しながら福井大学教職大学院に在籍した著者・木村・岸野・麻衣の長期実践報告「授業観察のプロセス：わかる授業から子どもの学びに至る授業へ」を取り上げる。著者が40歳代の男性で、西津小の研究主任である。本実践報告の中から学校づくりと同僚性の構築にかかわる部分、大学院授業に関する反映内容について記述されている箇所を抽出し分析を行う。

結 果 と 考 察
①反面教諭は、どの前任校でも「分かる授業」と同僚教師との相談を心がけてきた教諭である。西津小では、研究主任就任と大学院への入学が契機となって、指導中心の授業から分かる授業へ、そして「子どもの学びに沿う授業」へと進化がなされていく。

②西津小では、9人の教員のうち2番目生に若い研究主任であった。その教諭も時間の余裕がない。指導案等の検討を昼休み等に行う。授業を構想し指導する楽しさは感じが、研究授業が終わると元の指導書片手の授業に戻ってしまう。職員研修会であまり意見がでない。小グループでの話し合いを教頭に相談して導入。関連する意見交換が実現する。自身の実践の行き詰まり。大学院での他校との交流や実践の講話、スタッフの意見が転機を生む。「分ける授業から自己」学ぶ授業へ。同僚の授業を参観するが強い刺激となり、全員が公開授業を行う組織へ。組織された研究推進委員会が実践をリード「コムニティ・オブ・プラクティス」。夏休みに記録を残す。

③これまでの「確かな読みをもとにした表現力の育成（国語の研究）」に加えて「人権教育の指定校」となり、2つの研究テーマをどうするかが葛藤。1学期は国語、2学期以降は人権教育へ。教職大学院スタッフの発言「学校の悪いところ、研究期間が終われば直接肉眼を向けること2つが繋がる」から心機一転。

上記は学校の「子どもの学び」に着目授業研究、小グループでの検討、実践記録づくり、同僚との語り合い、2つの研究を行わなければならないハブニングの乗り越え等が、教職大学院からの授業として機能している。学校と大学院を繋ぐ学校観点方式・大学院の授業構造（学校での授業研究会と同様構造）・授業内容（学校の課題を意識した内容）・情報の広がり（他の実践者との交流と、優れた実践記録や理論書等の出会い）が、同僚性と学校づくりに効果を示している。授業として機能した理由は、反面教諭の実践や学校づくりに関し、大学院の経験が異なる役割と連絡する役割を果たしたからと思われる。